

道前平野農地整備事業に伴う

北竹ノ下Ⅰ遺跡の調査

公益財団法人愛媛県埋蔵文化財センター

遺跡名称 北竹ノ下Ⅰ遺跡 6～9区

調査場所 西条市石延・安用

委託者 農林水産省中国四国農政局
(道前平野農地整備事業所)

調査主体 (公財)愛媛県埋蔵文化財センター

調査期間 令和元年8月1日～令和2年3月19日(予定)

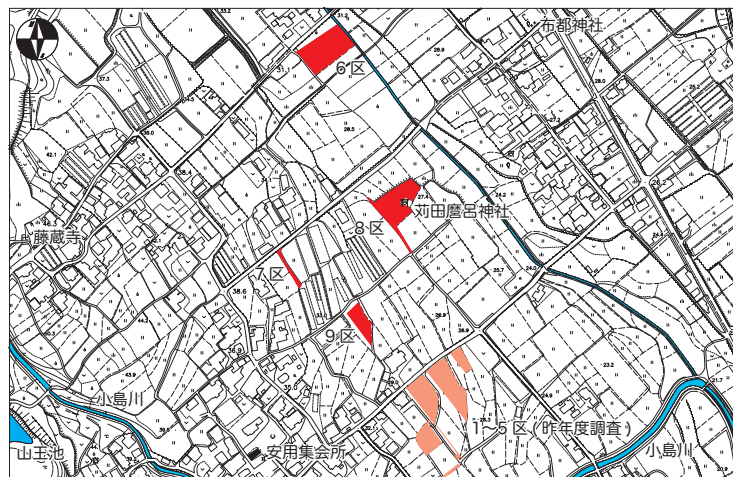
調査面積 4,390m²

北竹ノ下Ⅰ遺跡は西条市石延から安用に所在する遺跡で、昨年度より農地整備事業に伴う発掘調査を行っています。

昨年度調査では、西条市域で初の調査例となる平安時代以前に遡る水田跡を発見して注目を浴びましたが、2年目となる今年度の調査では、①弥生時代中頃～古墳時代初頭、②奈良～平安時代、③室町時代の終わり～江戸時代初期にかけての遺構や遺物を確認することができ、各時期の集落跡の様相が部分的に明らかとなりました。

弥生時代では、弥生時代中期中葉(今から約2,200年前)以降に造られた集落を確認し、この時期に造られた集落が古墳時代初頭頃(今から約1,700年前)まで存続したことや、その集落域が比較的広範囲に及ぶ事実などを確認しています。また、集落内から出土した土器のなかには畿内地域や吉備地域のものがみられ、当時これらの地域との間に文化的な交流があったことが明らかになりました。

室町時代では屋敷地の一部と考えられる方形区画溝などがみつかっています。部分的な調査であったため、屋敷地の全体像はやや不明瞭ですが、この時期の周辺の歴史を考えるうえで非常に貴重な資料であるといえます。



弥生時代終末～古墳時代初頭の集落跡発見時の様子(9区)

今年度調査の成果

今年度の調査では、昨年度調査を行った1-5区の北側に位置する4つの調査区(6-9区)で発掘調査を実施し、縄文時代～中世にかけての遺構や遺物を確認しています。

縄文時代

7区や9区で縄文時代早期(約11,000年前)^{おしがたもんどき}の押型文土器や縄文時代後期(約4,000年前)の無文土器がわずかに出土しています。縄文時代早期の遺跡はこれまで世田山山麓から六軒家で数カ所確認されていますが、大明神川右岸では初となる重要な発見といえます。遺構は見つかっていませんが、今後の調査で生活跡などの様子が明らかにされることが期待されます。

弥生時代

7区および9区で弥生時代後期～古墳時代初頭(約2,200年～1,700年前)にかけての竪穴建物12棟などを確認しており、付近一帯にこの時期の集落跡が存在することが明らかとなりました。竪穴建物が見つかった7区と9区は約120m程離れているため、見つかった集落跡は下の図に示すように比較的広い範囲に及ぶことが予想されます。また、詳しい時期ははまだ不明ですが、昨年度調査した1-5区では古墳時代頃の水田跡が見つかっていて、比較的時期も近いことから、今年度の調査で見つかった集落跡と何らかの関連性を持っていたことがうかがわれます。

奈良時代～平安時代

9区の南側で8世紀頃に建てられた小規模な竪穴建物を確認しているほか、自然流路などから、京都系の緑釉陶器などの奢侈品なども出土しています。この時期の遺跡の様相についてははまだ不明な点が多いですが、この時期のものは昨年度調査した3a区や4a区などでも確認されており、9区で見つかった遺構は付近に存在した集落の北端にあたるものとみられます。

室町時代～江戸時代初期

6区や8区で確認した建物の柱穴などから、この時期の集落跡が付近に点在していたことが明らかとなりました。特に8区で見つかった方形区画溝の一部は、周辺に展開した中世集落の様相を考える手がかりとなる重要な資料といえます。

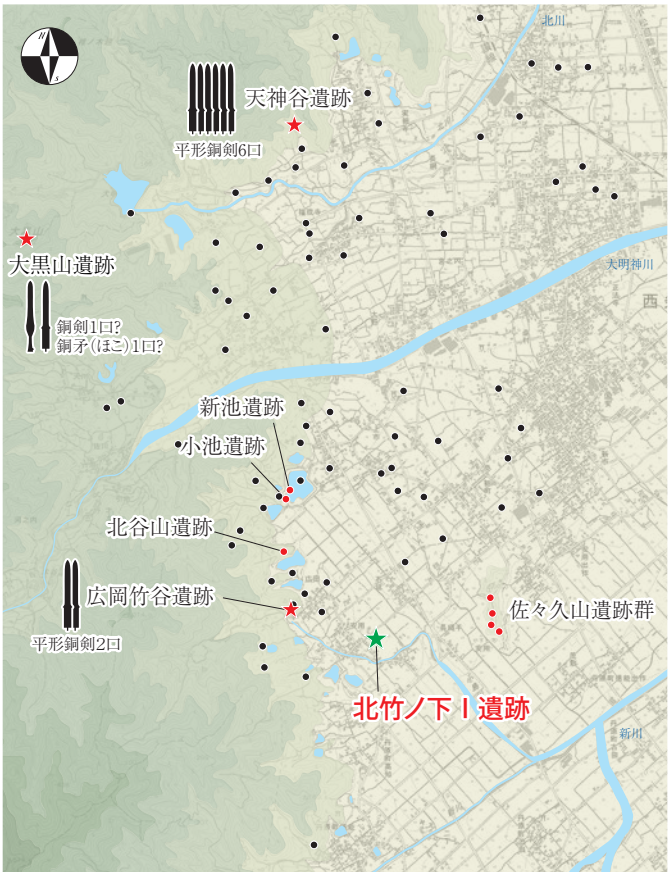


北竹ノ下Ⅰ遺跡と弥生時代の遺跡

今回の北竹ノ下Ⅰ遺跡の調査では弥生時代中頃～古墳時代初頭の集落跡が見つかりましたが、周辺でも弥生時代の遺跡が数多く確認されています。上市の北谷山遺跡(約2,000年前)、新池遺跡・小池遺跡(約2,000～1,800年前)では建物跡や土坑などの集落遺跡が発掘調査されていて、小池遺跡では県内でも珍しい小形内行花文仿製鏡(中国鏡を模倣して日本で作った鏡)が出土しています。一方、佐々久山では北谷山遺跡と同時期の甕棺墓の他、土墳墓や多数の甕棺の破片が発見されたことから、集落からは独立した墓域となっていたようです。

このほか、本遺跡の北東約450mに位置する広岡竹谷遺跡では、平形銅剣が2口出土しています。平形銅剣とは、武器としての実用性は低い、青銅製の祭祀具です。近隣では天神谷遺跡(福成寺・平形銅剣6口)や、大黒山遺跡(旦之上・記録のみ武器形青銅器2口)でも出土が確認されています。

今回実施した北竹ノ下Ⅰ遺跡の調査では、この地域の弥生時代から古墳時代への集落の移り変わりを知る貴重な資料を得ることができました。また、わずかではありますが、上述の平形銅剣と近い時期(約2,100年前)の遺構や遺物も検出しています。今後の調査によって集落の構造や周辺の遺跡との関係がより鮮明となる発見が期待されます。



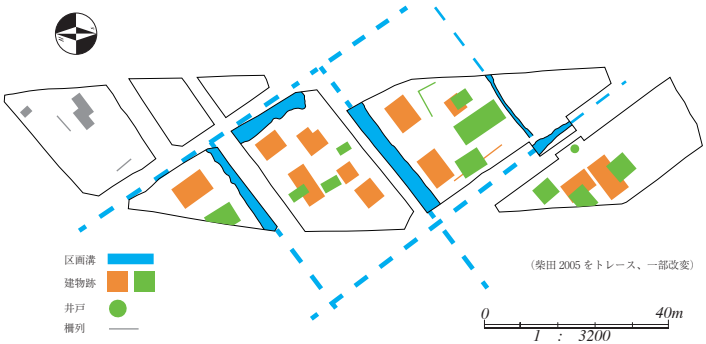
北竹ノ下Ⅰ遺周辺の弥生時代遺跡の分布

中世の安用

北竹ノ下Ⅰ遺跡では、昨年度調査を行った3区や、今年度調査を行った6区・8区において、中世の遺構・遺物が確認されています。特に8区では、微高地状に高くなる北東部分縁辺に沿うような、直角に屈曲する溝が確認されました。溝の全容ははっきりとしていませんが、平面形と規模から方形区画溝の可能性が考えられます。そして溝から出土した遺物から、この溝が使われていたのは15世紀以降と考えられます。

近隣で同じ時期の区画溝が確認されている遺跡としては、久枝遺跡(旧東予市周布)、願連寺元泉遺跡(旧丹原町)などが挙げられます。これらの区画溝は屋敷跡を区画するものと考えられていますので、今回確認された8区周辺も、同様な屋敷跡・集落があった可能性を想定できます。

安用周辺には中世に造られたと考えられる象ヶ森城や阿曾岡城といった山城が点在しています。15世紀以降は守護大名である河野氏やその配下である重見氏、旦之上氏の影響下にあったことが窺えますが、文献でも考古学的にも未だはっきりしたことがわかっていないのが現状です。そのため、今回の方形区画溝や6区の遺構は、この時期の周辺の様相を知るきっかけとなる資料であると考えられます。



久枝遺跡の方形区画溝と屋敷跡模式図



願連寺元泉遺跡の方形区画溝

北竹ノ下Ⅰ遺跡 6～9 区の年代

